

# アルク英語教育実態レポート

Vol. 5

[2015年7月]

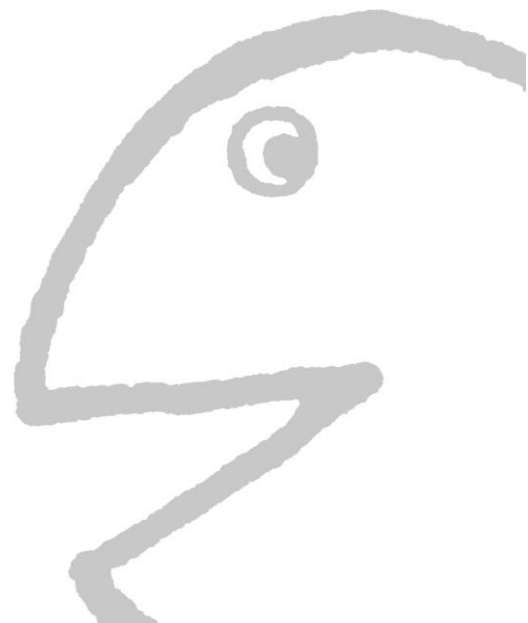


## 日本人の英語スピーキング能力

—英語スピーキングテスト TSST の結果に見る能力分布とその変化—

**アルク**

明日につづくことば。



# はじめに

---

株式会社アルクは1969年の創業以来、月刊誌『ENGLISH JOURNAL』、通信教育講座「1000時間ヒアリングマラソン」、書籍「キクタン」シリーズなど様々な英語学習教材を開発してきました。近年は英語スピーキング能力測定試験「TSST (Telephone Standard Speaking Test)」、「英語学習アドバイザー資格認定制度 (English Study Advisors' Certificate: ESAC)」を独自に開発し、学習成果の検証や継続的学習支援のサービスも提供するようになりました。

私たちは、語学学習者に成果をもたらす有益な方法を常に追求したいと考えています。そのためにアルク教育総合研究所を設立しました。「アルク教育総研」は、学習行動を成果に結びつけやすくするために、教材・学習法の研究、学習者個人・企業・教育機関のニーズ調査等を随時行い、その結果を公表しています。

2014年に続き、ここに、弊社が開発・運用するテストTSSTの受験結果から見える日本人の英語スピーキング能力の実態をご報告します。受験者を社会人、大学生、高校生に分け、社会人はさらに所属する業種別に分けて分析し、それぞれの特徴を明示しています。本レポートが英語教育関連各位の参考になれば幸いです。

## ◆本レポートの概要◆

---

1. 十分に仕事で英語を使えると言える TSST レベル 6 以上に属するのは、社会人も学生も、約 10%にとどまっている。
2. 業種別レベル分布をみると、他業種に比較して金融業では高レベル層の、製造業では低レベル層の割合が高い。
3. 業種別に過去 3 年間のレベル分布の推移をみると、銀行業の高レベル層の拡大が顕著である。
4. 大学生の過去 3 年間のレベル分布の推移をみると、高レベル層の拡大が特徴的である。
5. TSST と TOEIC の間には相関係数 0.68 で「中程度の」相関関係がある。一方、スピーキング能力とリスニング・リーディング能力のバランスの度合いは、個人によるバラツキが大きいのが実態である。バランスよく英語能力を判断するためには、2 つ以上の評価軸が必要である。

## ◆目次◆

---

1. TSST の概要	p. 3
2. TSST の評価方法	p. 3
3. TSST の評価基準と 9 つのレベル	p. 4
4. TSST と TOEIC <sup>®</sup> テストの関係	p. 5
5. 日本人の英語スピーキング能力のレベル分布－全体	p. 6
6. 日本人の英語スピーキング能力のレベル分布－社会人	p. 8
6.1 業種別レベル分布	
6.2 業種別レベル分布の 3 年間推移	
7. 日本人の英語スピーキング能力のレベル分布－大学生	p. 15
8. 日本人の英語スピーキング能力のレベル分布－高校生	p. 16
まとめ	p. 17

TSST (Telephone Standard Speaking Test) は、電話を使った英語スピーキング能力試験である。1997年から始まった対面インタビュー型テスト SST (Standard Speaking Test) の実績と経験からアルクが独自に開発し、2004年から運用を開始した。法人団体受験を中心に利用が伸び、SSTと合わせた受験者数は2015年4月時点で累計8万件を超えるまでになっている。本レポートは、TOEIC®テストのスコアも分かっている23,218人のデータを抜き出して分析したものである。

## 1. TSST の概要

TSST は団体受験、個人受験、いずれの形式でも利用できる。その概要は以下のとおりである。

1. 受験時間は約15分。
2. 高校生以上の受験者が対象。
3. 質問項目は受験者ごとにデータベースからランダムに抽出され、全10問が出題される。
4. 10の質問は、身の回りの具体的事柄について述べたり、何かの手順を説明したりするなど、難易度の異なるもので構成されている。
5. 質問音声は日本語・英語両方の言語で流れる。質問の英語が聞き取れないので回答できないことを防ぐためである。
6. 1問の回答時間は45秒。回答時間が経過後、次の質問が自動的に流れる。
7. 録音された回答音声を3人の評価官が独立して聞いて9段階評価した後、コンピューター処理をしてひとつの評価を決定する。
8. 固定電話、または携帯電話を利用して受験する。
9. 受験期間中は24時間受験が可能。
10. 評価結果は、受験期間終了後、原則的に約1週間後に Web 上で公開し、受験者は各自結果を確認する。
11. 法人団体受験の場合は、法人側担当者が受験者の結果一覧を Web からダウンロードできる。

## 2. TSST の評価方法

TSST は以下の4つの評価基準に基づいて「英語を使って何ができるか」を評価する。

### 言葉を使って何ができるか

= 総合的タスク・言語機能

### 聞き手にどれくらい正確に理解されるか

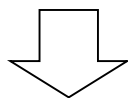
= 正確さ (文法、語彙、発音、流暢さ)

### 単語・句・文・段落をどのように使っているか

= テキストの型

### どのような内容、状況について話せるか

= 内容範囲・コンテキスト



評価者は上記基準に基づき、発話全体を見渡して評価する (包括的評価 holistic rating という)。

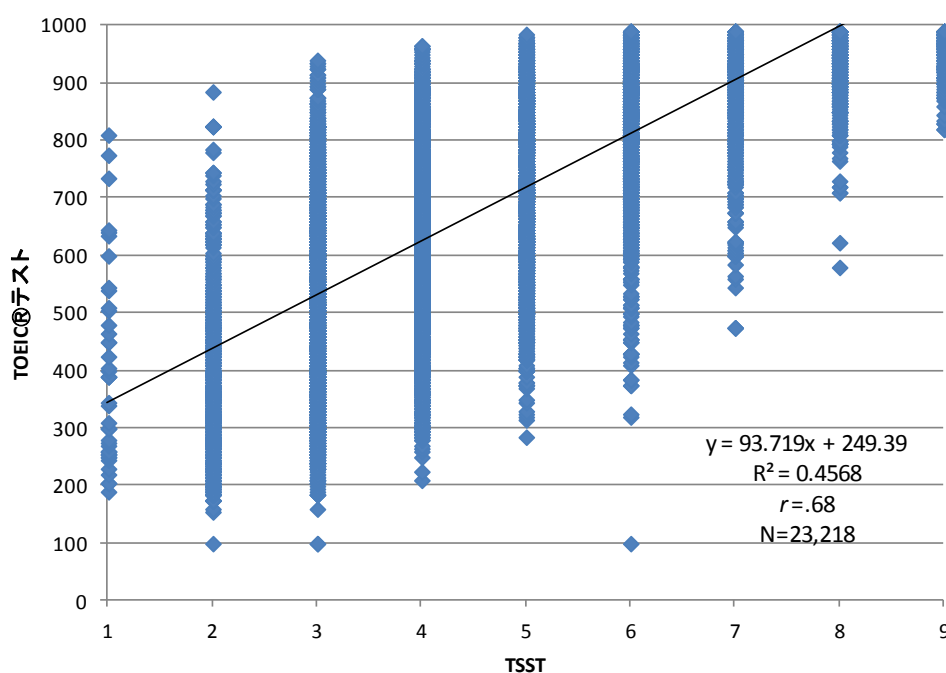
### 3. TSST の評価基準と9つのレベル

TSST の4つの評価基準ごとに9段階のレベルの特徴を記したものが下の表である。

Level	Global Functions 英語を使ってできるタスク	Accuracy (grammar, pronunciation, fluency, etc.) 正確さ(文法、発音、流暢さなど)	Context/Content 対応できる状況/話題	Text Type 使用できる文章の構造	参考 職場や生活の場でできること
9	時制を使いこなし、詳細な描写、比較、説明ができる。複雑な事態に対応できる。	文法には小さな誤りが時にあるが、意思疎通の妨げにはならない。母語話者に近い発音。母語話者なみの流暢さ。	個人的あるいは一般的な話題について具体的に話せる。	パラグラフを使って論理的なまとまりのある話ができる。	海外駐在で仕事をする／ネイティブスピーカーと時事問題について議論する／人前でスピーチをする。
8	詳細な描写、比較、説明がかなりできる。複雑な事態にある程度対応できる。	複雑な構文では時に大きな誤りがあるが、簡単な構文では殆ど誤りはない。日本語的発音が混じることもあるが、かなり流暢。	殆どの個人的あるいは一般的な話題について具体的に話せることが多い。	複雑な構文を使って話ができる。パラグラフを使うこともある。	海外出張で仕事をする／問題があった時に解決策を提案する／自分の業務について詳しく説明する。
7	Level 6 と同じ。	基本的には Level 6 と同じだが、文法的な正確さや発音の良さの点でより優れていることがある。	Level 6 と同じ。	基本的には Level 6 と同じだが、時にはより優れた構文の構成力がある。	海外出張で困らない／商品やサービスの問題点を指摘し、苦情を言う。
6	簡単な質問ができ、答えられる。社会生活の維持に必要な対話ができる。	複雑な構文ではよく大きな誤りがあるが、簡単な構文では誤りは少ない。日本語的発音が多いが、時には流暢である。	主に自分自身と身近な出来事に関する話題について話せる。	センテンスを使って話すことができ、複雑な構文を使うこともある。	海外出張で困らない／商品やサービスの問題点を指摘し、苦情を言う。
5	Level 4 と同じ。	基本的には Level 4 と同じだが、文法的な正確さや発音の良さの点でより優れていることがある。	Level 4 と同じ。	基本的には Level 4 と同じだが、時にはより優れた構文の構成力がある。	自分の業種や業務について簡単に概要を説明する／入手したい情報を得るために質問する／道案内をする。
4	社会生活の維持に必要な受け答えが何とかできる。	複雑な構文では頻繁に大きな誤りがあり、簡単な構文でもたまにある。日本語的発音と遅いスピードのためわかりにくいことがある。	主に自分自身と身近な出来事に関する話題について何とか話せる。	センテンスを使って話せるが、単純な構文が殆どである。	自分の業種や業務について簡単に概要を説明する／入手したい情報を得るために質問する／道案内をする。
3	サバイバルに必要な受け答えもかなりできるが、暗記した表現が多い。	簡単な構文でも大きな誤りが時々ある。強い日本語的発音と繰り返しや長い沈黙のため母語話者にはわからないことがある。	主に自分自身と身近な出来事に関する話題について話せることが多い。	センテンスを使って話すこともあるが、句や未完のセンテンスが多い。	簡単な自己紹介をする／レストランで食事を注文する／道に迷った時に人に助けを求める。
2	暗記した表現が使える。物事を列挙することができる。	簡単な構文でも大きな誤りがよくある。強い日本語的発音と繰り返しや長い沈黙のため母語話者にはわからないことが多い。	日常生活の話題について断片的に話せる。	単語や句が中心で、センテンスが混じる。	決り文句の挨拶を交わす／食べ物や身近なことについての好みを表す。
1	暗記した限られた表現が使える。物事を簡単に列挙することができる。	大きな誤りが簡単な構文でも頻繁にある。強い日本語的発音と繰り返しや長い沈黙のため母語話者にはたいていわからない。	日常生活の話題について非常に断片的に話せる。	語や句が殆どを占める。	挨拶されたら"Hello"や"Hi"と返す／感謝を示すために"Thank you"と言うことができる。

## 4. TSST と TOEIC<sup>®</sup>テストの関係

2004年から2014年までのTSST受験者の内、TOEIC<sup>®</sup>テストのスコア（リスニング＋リーディング）の分かる大学生以上の受験者23,218人のデータを以下にまとめた。TOEICのスコアは自己申告によるものである。



TSSTレベル	1	2	3	4	5	6	7	8	9
TOEIC平均	392	374	516	636	735	817	872	911	949

	平均	標準偏差	相関係数
TSST	4.23	1.22	0.68
TOEIC	646	168.91	

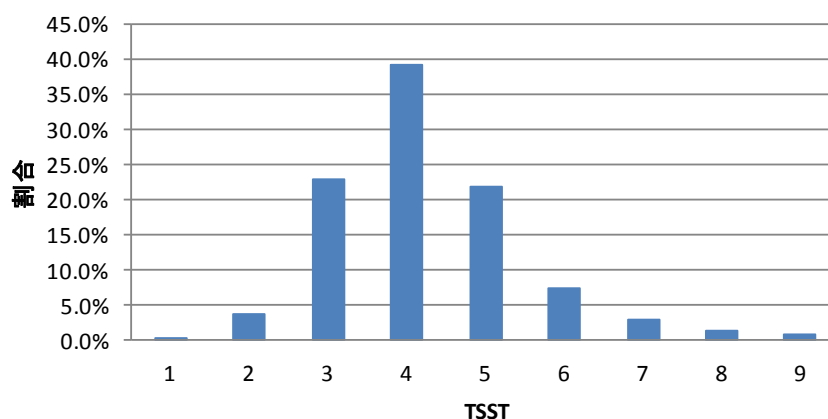
TSST と TOEIC の間には相関係数 0.68 で「中程度の」相関関係があるのが分かる。一方、スピーキング能力とリスニング・リーディング能力のバランスの度合いは、上の分布図にあるように個人によるバラツキが大きいのが実態である。TOEIC は高スコアだが上手く話せない、スコアが低目の割には話せる、など個人差が大きいということである。TSST レベルと TOEIC スコアが大きくばらついている例をみよう。TSST レベル 3（＝誤解なく意味の伝わるセンテンスを作って話すには困難が伴うレベル）の人の TOEIC は 200 点～900 点くらいまでの幅がある。TOEIC を基準に見てみると、例えば 800 点の人は TSST レベル 2（暗記した決り文句などが言える）～レベル 8（海外出張、駐在ができる）まで幅がある。バランスよく英語能力を判断するためには、2 つ以上の評価軸が必要である。

TSST レベル 1（日本語的発音で少数の単語をやっと並べられる程度）の受験者の TOEIC スコア平均は、レベル 2 の受験者の TOEIC スコア平均を上回っている。これは、スピーキングレベルに比して TOEIC が高めの人がレベル 1 の受験者に多かったからである。

## 5. 日本人の英語スピーキング能力のレベル分布 — 全体

下の図は分析対象 23,218 人における TSST のレベル分布を示したものである。レベル 5（自分の文を作って話せるがまだ誤りが多い）以下に全体の 87.8% が属している。海外赴任や留学に出て何とかやっつけていけるのはレベル 6 以上である。つまり、今の日本で英語を使う・話す状況にある社会人や学生は多いが、その多くはかなり苦勞しつつ英語で仕事や学業に取り組んでいるということになる。

### TSSTレベル分布

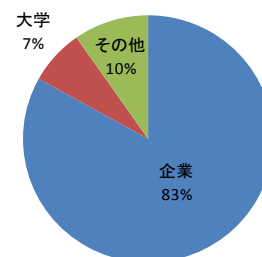


TSSTレベル	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
人数	44	870	5,306	9,087	5,092	1,711	662	287	159	23,218
割合	0.2%	3.7%	22.9%	39.1%	21.9%	7.4%	2.9%	1.2%	0.7%	100.0%

上記のデータを「企業団体受験者」「大学団体受験者」「その他受験者」の3つに分けてみると以下のようなになる。「その他受験者」とは主に個人受験者を指している。

### 受験者内訳

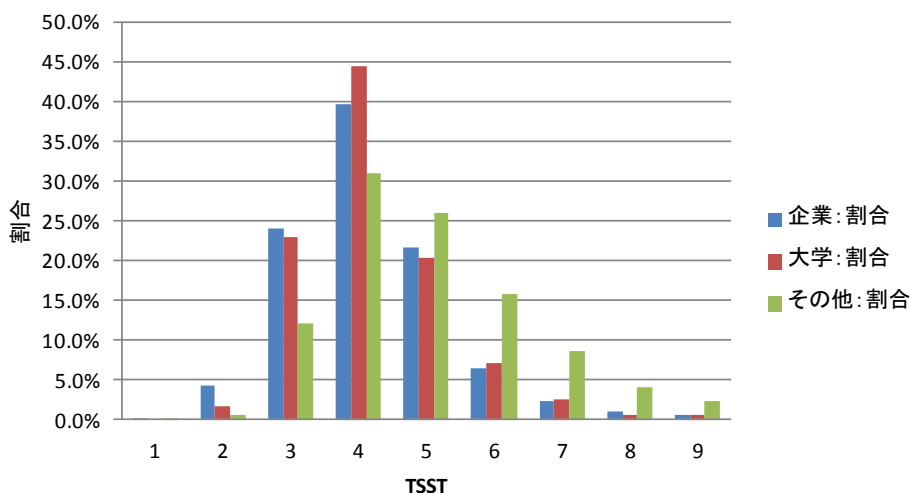
	企業	大学	その他	計
人数	19,281	1,673	2,264	23,218
割合	83.0%	7.2%	9.8%	100.0%



TSSTレベル	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
企業:受験者数	43	832	4,649	7,642	4,165	1,238	427	184	101	19,281
大学:受験者数	0	27	384	743	341	117	42	11	8	1,673
その他:受験者数	1	11	273	702	586	356	193	92	50	2,264
TSSTレベル	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
企業:割合	0.2%	4.3%	24.1%	39.6%	21.6%	6.4%	2.2%	1.0%	0.5%	100.0%
大学:割合	0.0%	1.6%	23.0%	44.4%	20.4%	7.0%	2.5%	0.7%	0.5%	100.0%
その他:割合	0.0%	0.5%	12.1%	31.0%	25.9%	15.7%	8.5%	4.1%	2.2%	100.0%

レベル3～5に多くの受験者が集中しているという全体の傾向は、「企業」「大学」「その他」の3グループで共通した傾向である。レベル3～5の人が占める割合は、「企業」85.3%、「大学」87.7%、「その他」68.9%となる。「その他」に比較的レベルの高い受験者が多いのは、積極的に自分のスピーキング能力を調べたいという個人のほか、何らかの必要があって受験した英語教師や企業の人事担当者などが含まれているためと思われる。

### TSSTレベル分布



	全体	企業	大学	その他
TSST平均	4.23	4.14	4.21	4.97
TOEIC平均	646	635	637	741
相関係数	0.68	0.67	0.60	0.68
TSST標準偏差	1.22	1.17	1.09	1.43
TOEIC標準偏差	168.91	169.01	136.60	159.70

上の図表を見ると、「その他」→「大学」→「企業」の順でTSSTレベル平均、TOEICのスコア平均が高かった。「その他」グループは、レベル6以上の方が全体の30.5%に上る。レベル6以上とは、自分の専門分野の知識や経験が一定以上備わっていれば、海外出張はもちろん海外赴任も含めて、英語を使って仕事をしていくことができるレベルである。



## 6. 日本人の英語スピーキング能力のレベル分布 — 社会人

ここでは、企業法人に所属している社会人受験者 19,281 件を抽出して、業界別にどのような特徴があるのかを見てみたい。

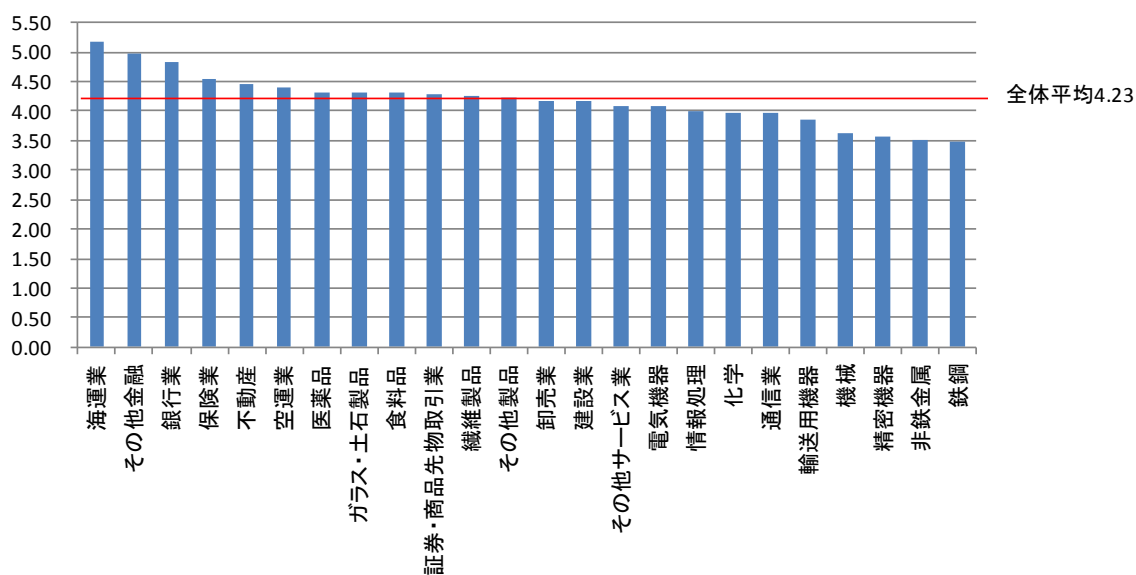
### 6.1 業種別レベル分布

受験者の所属する企業を業種ごとにグループ化し、受験者数とその TSST 平均レベルをまとめ、TSST の平均レベル順に並べたものが左側の表である。受験数が少ない場合は、その受験者集団がその業界を代表するとは見なすことができないので、受験 50 件以上の業種のみを取り上げたのが右側の表である。

TSST 受験者全体の平均レベル 4.23 以上なのは、海運業、その他金融、銀行業、保険業、不動産、空運業、医薬品、ガラス・土石製品、食料品、証券・商品先物取引業、繊維製品、その他製品、の 12 業種という結果になった。

業種	人数	TSST平均	業種(受験が30件以上)	人数	TSST平均
広告業	1	7.00	海運業	448	5.17
陸運業	4	6.75	その他金融	82	4.98
金属製品	15	5.20	銀行業	1,777	4.84
海運業	448	5.17	保険業	1,134	4.53
パルプ・紙	3	5.00	不動産	334	4.47
その他金融	82	4.98	空運業	340	4.40
銀行業	1,777	4.84	医薬品	695	4.32
小売業	5	4.80	ガラス・土石製品	112	4.30
電気・ガス業	12	4.67	食料品	519	4.30
保険業	1,134	4.53	証券・商品先物取引業	87	4.29
石油・石炭製品	8	4.50	繊維製品	653	4.27
不動産	334	4.47	その他製品	536	4.23
空運業	340	4.40	卸売業	203	4.17
医薬品	695	4.32	建設業	305	4.16
ガラス・土石製品	112	4.30	倉庫・運輸関連業	13	4.16
食料品	519	4.30	その他サービス業	1,409	4.09
証券・商品先物取引業	87	4.29	電気機器	1,978	4.08
繊維製品	653	4.27	ゴム製品	3	4.00
その他製品	536	4.23	情報処理	343	4.00
卸売業	203	4.17	化学	2,745	3.98
建設業	305	4.16	通信業	587	3.96
倉庫・運輸関連業	13	4.16	輸送用機器	2,618	3.86
その他サービス業	1,409	4.09	鉱業	16	3.81
電気機器	1,978	4.08	機械	633	3.62
ゴム製品	3	4.00	精密機器	1,008	3.58
情報処理	343	4.00	非鉄金属	477	3.51
化学	2,745	3.98	鉄鋼	176	3.47
通信業	587	3.96	官公庁	2	3.00
輸送用機器	2,618	3.86			
鉱業	16	3.81			
機械	633	3.62			
精密機器	1,008	3.58			
非鉄金属	477	3.51			
鉄鋼	176	3.47			
官公庁	2	3.00			

## 業種別TSST平均



特定の業種の中でのレベル分布はどうなっているのか。受験者 1,000 件以上になっている精密機器、輸送用機器、化学、電気機器、その他サービス業、保険業、銀行業の 7 業種について見てみたい。レベル別の実際の受験者数と、全体に占める割合は以下の表のとおりである。

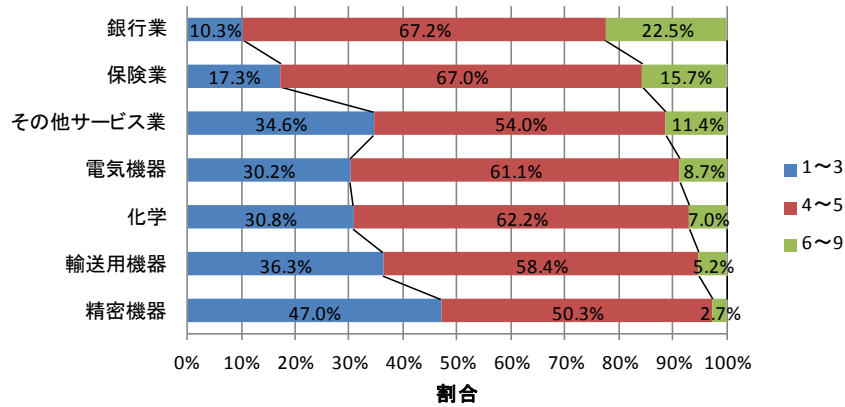
業種	1	2	3	4	5	6	7	8	9	総計
精密機器	9	116	349	379	128	24	2	1	0	1,008
輸送用機器	6	183	762	1,053	477	111	21	5	0	2,618
化学	10	109	726	1,228	479	147	35	5	6	2,745
電気機器	3	78	516	790	419	124	30	11	7	1,978
その他サービス業	3	95	390	458	303	101	36	17	6	1,409
保険業	0	7	189	472	288	90	39	28	21	1,134
銀行業	0	5	178	640	555	202	103	61	33	1,777

業種	1	2	3	4	5	6	7	8	9	総計
精密機器	0.9%	11.5%	34.6%	37.6%	12.7%	2.4%	0.2%	0.1%	0.0%	100.0%
輸送用機器	0.2%	7.0%	29.1%	40.2%	18.2%	4.2%	0.8%	0.2%	0.0%	100.0%
化学	0.4%	4.0%	26.4%	44.7%	17.4%	5.4%	1.3%	0.2%	0.2%	100.0%
電気機器	0.2%	3.9%	26.1%	39.9%	21.2%	6.3%	1.5%	0.6%	0.4%	100.0%
その他サービス業	0.2%	6.7%	27.7%	32.5%	21.5%	7.2%	2.6%	1.2%	0.4%	100.0%
保険業	0.0%	0.6%	16.7%	41.6%	25.4%	7.9%	3.4%	2.5%	1.9%	100.0%
銀行業	0.0%	0.3%	10.0%	36.0%	31.2%	11.4%	5.8%	3.4%	1.9%	100.0%

TSST は 9 段階評価であるが、実際に英語を話して仕事ができるかという観点から 3 カテゴリーに分けてみる。まだ基礎学習が必要なレベル 1～3、実践的に英語を使う準備段階のレベル 4～5、自分の専門業務に関わることであれば一定の不自由は抱えつつも英語を話して仕事ができるレベル 6～9 の 3 つである。3 カテゴリーに分けて業種ごとの違いを見ると、以下ようになる。

### 業種別TSSTレベル分布



業種	1~3	4~5	6~9	総計
精密機器	47.0%	50.3%	2.7%	100.0%
輸送用機器	36.3%	58.4%	5.2%	100.0%
化学	30.8%	62.2%	7.0%	100.0%
電気機器	30.2%	61.1%	8.7%	100.0%
その他サービス業	34.6%	54.0%	11.4%	100.0%
保険業	17.3%	67.0%	15.7%	100.0%
銀行業	10.3%	67.2%	22.5%	100.0%

レベル4～5に全体の5、6割の受験者が集中しているのは、どの業種においても共通した傾向である。レベル1～3、レベル6～9のカテゴリーに注目すると、業種毎の特徴が見える。

「銀行業」「保険業」「その他サービス業」等は、他の業種に比較してレベル6～9の割合が高い（「その他サービス業」の中には、監査法人、研究所、人材派遣、会話学校などの企業が含まれている）。一方、「精密機器」「輸送用機器」「化学」はレベル1～3の割合が相対的に高い。

ここで、過去1年間に仕事で英語を話した（書いた）人でTOEICのスコア申告可能な825人を対象に（株）アルクがインターネットを使って行った調査（『アルク英語教育実態レポート Vol. 3 - 日本人の仕事現場における英語使用実態調査-』）を引用したい。回答者の属性に関して、業種では「製造業」（全体の42.4%）、職種では「技術職」（全体の20.1%）と回答した人が最も多かった。この調査結果と上記データを考え合わせると、製造業という分野で仕事をしており、かつ英語のスピーキング試験を受ける人たちの中には、技術者が多く含まれていると言えそうである。

つまり、金融業では、スピーキング能力が高い人が活躍する比率が高く、製造業では、英語を使って仕事をしている人でもスピーキング能力があまり高くない人の比率が高い、非製造業はその中間的性質を示している、ということになる。

（『アルク英語教育実態レポート Vol. 3 - 日本人の仕事現場における英語使用実態調査-』は下記を参照。

<http://www.alc.co.jp/company/report/index.html>）

## 6.2 業種別レベル分布の3年間推移

さらに、この7つの業種の、過去3年間のレベルの推移はどうなっているのだろうか。2012～2014年のTSSTのレベル分布の推移を「レベル1～3」「レベル4～5」「レベル6～9」の3カテゴリーに分けて見てみよう。3年間のTSSTのレベル毎の件数、その全体に占める割合、3カテゴリーに分けた場合の割合に分けて作ったのが下の表である。レベルを3カテゴリーに分けた場合の割合を帯グラフにして、全体と業種ごとの3年間の推移を記したのが14ページである。

金融業は他業種に比して高いレベルの人が多いという特徴があった。特に「銀行業」において、この3年間で、「レベル6～9」が15.3%→25.1%→30.5%と確実に増えている一方、「レベル4～5」が72.2%→67.8%→62.0%と減少しているのが顕著な変化である。銀行業界にスピーキング能力が高い人が増えている、あるいは、スピーキング能力が高い人も英語スピーキングテストを受験するようになってきている、ということができる。

「保険業」「その他サービス業」は「レベル1～3」の比率が小さくなり「レベル4～5」の割合が大きくなっている。「初級者」層が減り、「中級者」層が増えているのが分かる。

製造業の4業種「電機機器」「化学」「輸送用機器」「精密機械」は、過去3年間では共通した顕著な傾向が見えない。「レベル4～5」の人は、マニュアル等が使える定型的業務であれば何とか英語で業務ができる場合がある。この層の厚みが業種によって大きく異なっていることが、その業種の特徴を示しているのかもしれない。

### ■全体

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
2012		106	790	1322	748	287	117	42	28	3440
2013	3	155	1045	1731	1083	386	149	63	40	4655
2014	2	136	795	1701	898	292	104	50	30	4008

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
2012	0.0%	3.1%	23.0%	38.4%	21.7%	8.3%	3.4%	1.2%	0.8%	100.0%
2013	0.1%	3.3%	22.4%	37.2%	23.3%	8.3%	3.2%	1.4%	0.9%	100.0%
2014	0.0%	3.4%	19.8%	42.4%	22.4%	7.3%	2.6%	1.2%	0.7%	100.0%

年	1～3	4～5	6～9	計
2012	26.0%	60.2%	13.8%	100.0%
2013	25.8%	60.5%	13.7%	100.0%
2014	23.3%	64.8%	11.9%	100.0%

### ■銀行業

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
2012		2	50	161	137	36	17	7	3	413
2013		1	41	198	202	87	37	14	10	590
2014			27	110	114	48	31	20	11	361

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
2012	0.0%	0.5%	12.1%	39.0%	33.2%	8.7%	4.1%	1.7%	0.7%	100.0%
2013	0.0%	0.2%	6.9%	33.6%	34.2%	14.7%	6.3%	2.4%	1.7%	100.0%
2014	0.0%	0.0%	7.5%	30.5%	31.6%	13.3%	8.6%	5.5%	3.0%	100.0%

年	1～3	4～5	6～9	計
2012	12.6%	72.2%	15.3%	100.0%
2013	7.1%	67.8%	25.1%	100.0%
2014	7.5%	62.0%	30.5%	100.0%

■保険業

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
2012		2	71	118	56	19	12	7	7	292
2013		2	77	189	127	38	16	11	11	471
2014		3	39	151	90	30	9	8	2	332

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
2012	0.0%	0.7%	24.3%	40.4%	19.2%	6.5%	4.1%	2.4%	2.4%	100.0%
2013	0.0%	0.4%	16.3%	40.1%	27.0%	8.1%	3.4%	2.3%	2.3%	100.0%
2014	0.0%	0.9%	11.7%	45.5%	27.1%	9.0%	2.7%	2.4%	0.6%	100.0%

年	1~3	4~5	6~9	計
2012	25.0%	59.6%	15.4%	100.0%
2013	16.8%	67.1%	16.1%	100.0%
2014	12.7%	72.6%	14.8%	100.0%

■その他サービス業

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
2012		15	91	110	55	16	6	2		295
2013		16	65	80	75	32	4	3		275
2014	1	3	19	91	84	33	13	3	1	248

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
2012	0.0%	5.1%	30.8%	37.3%	18.6%	5.4%	2.0%	0.7%	0.0%	100.0%
2013	0.0%	5.8%	23.6%	29.1%	27.3%	11.6%	1.5%	1.1%	0.0%	100.0%
2014	0.4%	1.2%	7.7%	36.7%	33.9%	13.3%	5.2%	1.2%	0.4%	100.0%

年	1~3	4~5	6~9	計
2012	35.9%	55.9%	8.1%	100.0%
2013	29.5%	56.4%	14.2%	100.0%
2014	9.3%	70.6%	20.2%	100.0%

■電気機器

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
2012		21	98	167	75	29	4	5	3	402
2013		12	125	123	48	8	4			320
2014		6	80	181	92	12	1			372

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
2012	0.0%	5.2%	24.4%	41.5%	18.7%	7.2%	1.0%	1.2%	0.7%	100.0%
2013	0.0%	3.8%	39.1%	38.4%	15.0%	2.5%	1.3%	0.0%	0.0%	100.0%
2014	0.0%	1.6%	21.5%	48.7%	24.7%	3.2%	0.3%	0.0%	0.0%	100.0%

年	1~3	4~5	6~9	計
2012	29.6%	60.2%	10.2%	100.0%
2013	42.8%	53.4%	3.8%	100.0%
2014	23.1%	73.4%	3.5%	100.0%

■化学

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
2012		8	70	108	37	16	7		1	247
2013		15	69	109	39	6	1			239
2014		12	76	173	43	12	1			317

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
2012	0.0%	3.2%	28.3%	43.7%	15.0%	6.5%	2.8%	0.0%	0.4%	100.0%
2013	0.0%	6.3%	28.9%	45.6%	16.3%	2.5%	0.4%	0.0%	0.0%	100.0%
2014	0.0%	3.8%	24.0%	54.6%	13.6%	3.8%	0.3%	0.0%	0.0%	100.0%

年	1~3	4~5	6~9	計
2012	31.6%	58.7%	9.7%	100.0%
2013	35.1%	61.9%	2.9%	100.0%
2014	27.8%	68.1%	4.1%	100.0%

■輸送用機器

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
2012		12	42	54	39	10	1	1		159
2013	1	47	142	122	43	13	3			371
2014		49	182	194	71	21	6	2		525

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
2012	0.0%	7.5%	26.4%	34.0%	24.5%	6.3%	0.6%	0.6%		159
2013	0.3%	12.7%	38.3%	32.9%	11.6%	3.5%	0.8%	0.0%		371
2014	0.0%	9.3%	34.7%	37.0%	13.5%	4.0%	1.1%	0.4%		525

年	1~3	4~5	6~9	計
2012	34.0%	58.5%	7.5%	100.0%
2013	51.2%	44.5%	4.3%	100.0%
2014	44.0%	50.5%	5.5%	100.0%

■精密機器

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
2012		11	69	62	20	3				165
2013		9	82	127	33	6	1	1		259
2014		6	39	52	13	1				111

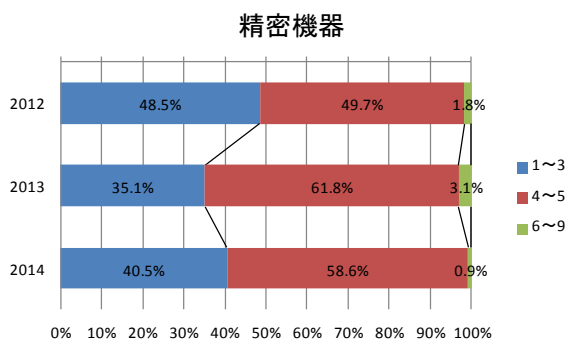
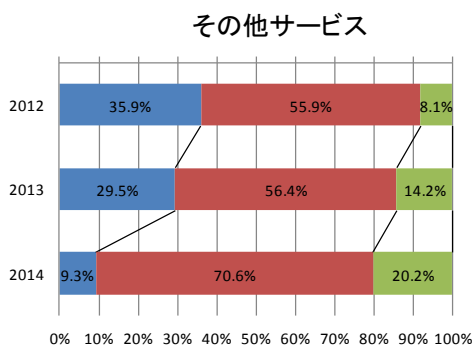
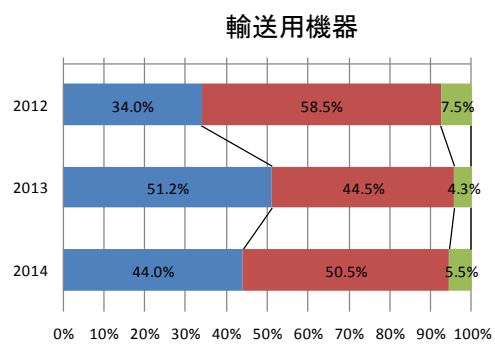
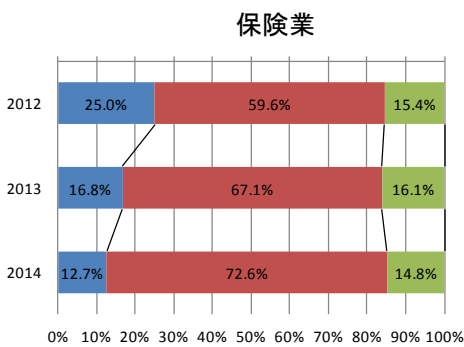
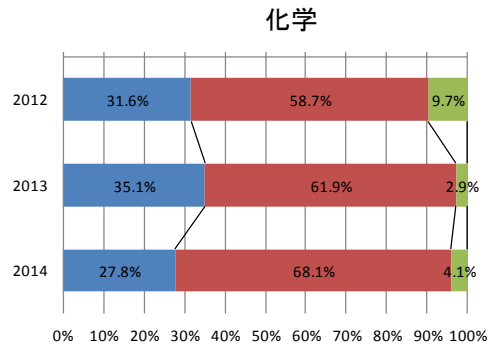
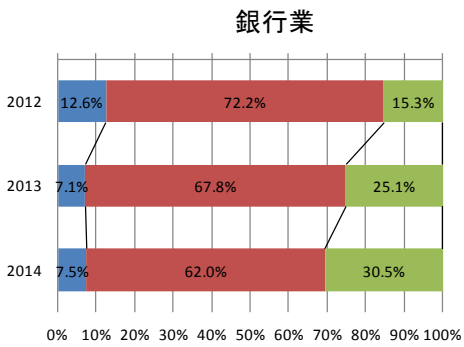
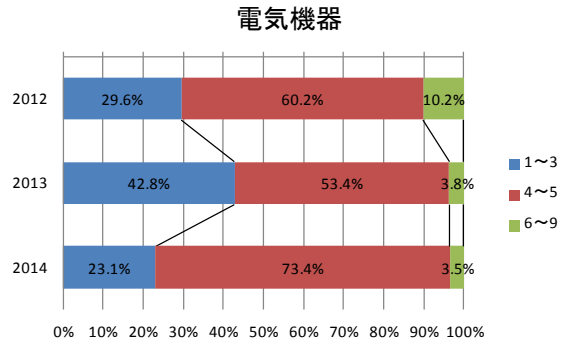
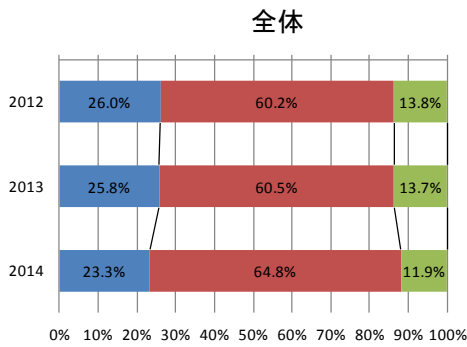
  

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
2012	0.0%	6.7%	41.8%	37.6%	12.1%	1.8%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
2013	0.0%	3.5%	31.7%	49.0%	12.7%	2.3%	0.4%	0.4%	0.0%	100.0%
2014	0.0%	5.4%	35.1%	46.8%	11.7%	0.9%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%

年	1~3	4~5	6~9	計
2012	48.5%	49.7%	1.8%	100.0%
2013	35.1%	61.8%	3.1%	100.0%
2014	40.5%	58.6%	0.9%	100.0%

## 2012～2014年の業種別 TSST レベル分布の推移



## 7. 日本人の英語スピーキング能力のレベル分布 — 大学生

調査対象サンプル 23,218 件の内、大学の団体受験者は約 7.2%に当たる 1,673 件である。TSST レベルの分布は先に触れたとおりである。全体、企業グループと比較してもレベル分布の形に大きな違いはない。TOEIC®テストとの関係を示す相関係数は 0.60 で「企業」「その他」のグループと比べるとやや低い結果になっている。

企業グループで 2012～2014 年の TSST レベル分布の変化を見たように、「大学」グループでも「レベル 1～3」「レベル 4～5」「レベル 6～9」の 3 カテゴリーにまとめて変化の傾向をみてみよう。

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	総計
2012	0	12	91	142	72	19	9	1	0	346
2013	0	3	62	130	61	23	8	1	1	289
2014	0	6	37	80	47	25	7	1	1	204

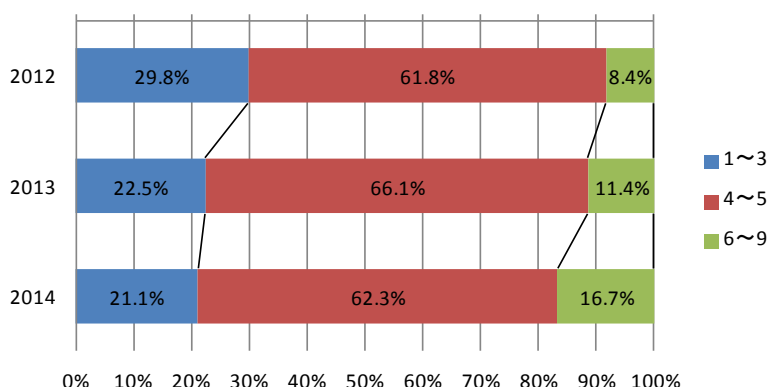
  

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
2012	0.0%	3.5%	26.3%	41.0%	20.8%	5.5%	2.6%	0.3%	0.0%	100.0%
2013	0.0%	1.0%	21.5%	45.0%	21.1%	8.0%	2.8%	0.3%	0.3%	100.0%
2014	0.0%	2.9%	18.1%	39.2%	23.0%	12.3%	3.4%	0.5%	0.5%	100.0%

年	1～3	4～5	6～9	計
2012	29.8%	61.8%	8.4%	100.0%
2013	22.5%	66.1%	11.4%	100.0%
2014	21.1%	62.3%	16.7%	100.0%

TSSTレベル分布の推移



TOEIC スコアと TSST レベルの両方が分かるサンプルの数は 3 年間でやや減少しているが、「レベル 6～9」が 8.4%→11.4%→16.7%と着実に増えているのが特徴的である。TSST の受験者に理系の大学院生、「グローバルリーダー育成」関連の教育プログラムに参加する人たちが増えていることを反映していると思われる。

「レベル 4～5」の層が 3 年間 60%台で推移している。この層の平均的 TOEIC スコアは 600 点台から 700 点台である。つまり「レベル 4～5」の人は英語に関する知識は一定以上備わっているとみなすことができる。蓄えた知識を「運用能力」に転換するような教育が大学で施されれば TSST のレベルを上げることが可能である。そうなれば、この層の学生が社会に出た時、少なくとも英語能力に関しては「一定の不自由さはあるが何とか仕事ができる」レベルには達していることになる。



## 8. 日本人の英語スピーキング能力のレベル分布 — 高校生

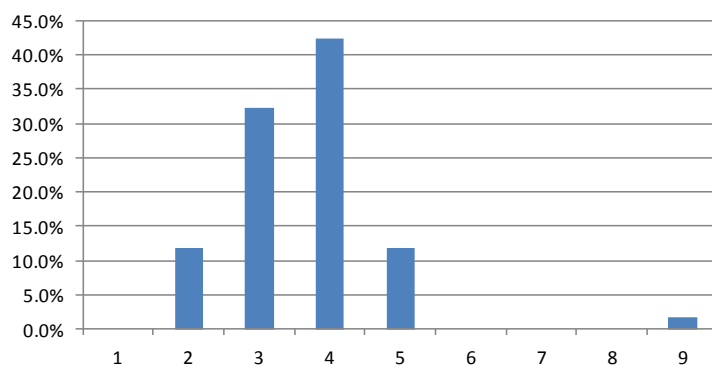
大学の入学試験に4技能試験を導入する動きが急である。学校レベルで、あるいは教師の個人レベルで、授業の中で「英語を話す」ためのさまざまなアクティビティが実施されている。しかし、日本の高校生の「スピーキング能力の分布」に関わる公表データはまだ少ない。

ここに TSST を受けた高校生 59 人のデータを紹介する。TOEIC スコアは不明である。高校の団体受験の例はまだ少ないが、対面の面接形式でない電話を通してのスピーキング試験であっても下に示すような結果となった。知っている単語をやっと並べる程度の「レベル1」がないこと、大学生、社会人のレベル分布に近い形を示していることが興味深い。

ここに示すサンプルは、大学の進学指導とともに授業での「スピーキング活動」にある程度取り組んでいる高校の2年生と3年生であった。つまり、高校でもある程度「スピーキング活動」に力を入れた教育を実施すれば、決り文句を繰り返すだけでなく、状況に応じて「自分なりの文」を作ってメッセージを伝えることができるようになることを示している。

高校の授業において語彙、文法、リーディング、リスニングの学習が重要なのはもちろんである。今後は、蓄えた知識を実際に使ってみる訓練、あるいは、実際に使う体験を通して知識の定着を図るような教育がますます重要になってくるものと思われる。

高校生のTSSTレベル分布



TSST	1	2	3	4	5	6	7	8	9	総計
人数	0	7	19	25	7	0	0	0	1	59
割合	0.0%	11.9%	32.2%	42.4%	11.9%	0.0%	0.0%	0.0%	1.7%	100.0%

# まとめ

日本社会の様々な分野で「グローバル化」が叫ばれて久しい。海外売上比率を高めようとする大企業のみならず、地方の中小企業も生き残りを掛けて海外との取引を進めるようになってきた。産業界の動きを受けて、高校や大学も「教育のグローバル化」を掲げて教育内容を見直すようになってきた。

グローバル人材の定義のひとつとして文部科学省は以下の3要素を備えている人材とした。①言語力・コミュニケーション力、②主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、③異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ。要するに、共通の母語を持たない人としっかり関係作りができる人ということであろう。

人間関係を作る時、言葉をお話あるいは書くという行為は避けて通れない。だからこそ、大学入学試験の英語は「4技能試験」にすべしという議論が起こり、TOEIC®テストの受験者数が過去最高を更新しているのだろう。

本レポートは、TSSTという「窓」から見える現在の日本人の英語スピーキング能力の実態を報告した。TSSTは9段階評価である。これを、まだ基礎学習が必要なレベル1～3、実践的に英語を使う準備段階のレベル4～5、自分の専門業務に関わることであれば一定の不自由は抱えつつも英語を話して仕事ができるレベル6～9の3つのカテゴリーに分けて見た時、社会人も学生もTSSTレベル5以下に約90%が集中していた。残念ながら英語を使って他人と信頼関係を築いていくのは難しいこのレベルにいる多くの人が「グローバル化」社会を乗り切ろうとしているのである。

過去3年間のTSSTレベル分布の推移からは、明るい兆しも見えた。特に銀行業と大学生の「レベル6～9」グループに属する人の割合が年々増えてきた。レベル6以上であれば、一定の不自由さは抱えつつもなんとか英語で仕事ができる。ある大手商社は「レベル6以上取得」を海外赴任の条件にしている。

ペーパーテスト重視で教育を受けてきた日本人は英語が話せないと繰り返し言われてきた。しかし、本レポートのデータを見る限り、はっきり変化の兆しは見えている。英語を使う必要性が高い業種・分野では確実に「話す能力」が高い人が増えている。仕事上の要請と教育機関の多様な取り組みの結果が数値に表れてきているのだと思われる。今後もこのレポートを通じて日本人の英語スピーキング能力の推移を報告していきたい。

■参考■

### 各種テストの能力指標一覧

TSST	TOEIC	英検	CEFR	TOEFL iBT	TOEFL ITP	TOEIC Speaking	GTEC for Students	BLATS	IELTS	英語を話してできること
9	900	1級	C2	100	600	160		C2	7.0	どんな状況においても、筋道を立てて、十分な説得力をもって話すことができます。第三者へのアドバースや抽象性の高い内容を話すときも、聞き手が理解しやすいように話を構成しています。
8			C1	90				C1		様々な状況および話題について、完璧ではないにしても、自分の言いたいことを常に具体的に、説得力を持って言うことができ、論理的に話を展開する能力を発揮しつづけます。
7	800	準1級	B2	80		150		B2	6.5	過去のできごとや物事の説明をする際、まだ話題に左右されますが、細かい描写を加えたり、自分の経験談を交えたり、簡単な感想や意見を交えることより、自発的に話を膨らませることができます。
6			B1	70				B1		身近なことに限っては、余裕を持って話すことができます。比較や過去のできごとの説明もできますが、複雑な内容の場合は言いよどみや情報の不足が見られることがあります。
5	700	2級	B1	60	500	130	800	B1	6.0	身近な話題であれば、多くの場合、自分から付加的な情報を提供しています。適切な言葉が見つからない場合も、知っている単語を駆使してなんとか言いたいことを伝えることができます。
4	600		A2	50				A2	5.5	様々な質問に文で答えることができ、簡単な理由を説明したり、描写をしたりすることができます。身近な話題であれば、自分から情報を付け加えることもあります。
3	500	準2級	A2	400		110	600	A2	5.0	きちんと受け答えできるのは身近な話題に限られますが、半分程度の確率で構成が簡単な文で基本的な内容は伝えることができます。
2	400		A1					90	A1	発話までに時間がかかり、内容も最小限の情報に限られます。自分から情報を付け加えることはほとんどありませんが、質問に対して返答することができます。
1	300	3-5級	A1	300	80	400	300	A1	質問に反応することができずに沈黙が続いてしまうことが多く、発話はずり遅延している短文に限られます。	

この表はあくまでも目安です。下記を参照してアルクが独自に作成しました。

[http://4skills.eiken.or.jp/qualification/comparison\\_cefr.html](http://4skills.eiken.or.jp/qualification/comparison_cefr.html)

<http://www.ets.org/toefl/institutions/scores/compare>

<http://takeielts.britishcouncil.org/find-out-about-results/understand-your-ielts-scores/common-european-framework-equivalencies>

<http://www.ielts-prep.jp/about/toEIC.html>

<http://www.alc.co.jp/company/report/>

<https://www.ets.org/toefl/institutions/scores/compare/>

<http://www.cieej.or.jp/toefl/itp/correlation.html>

<http://www.toEIC.or.jp/sw/about/data.html>

[http://www.benesse-gtec.com/fs/teachers/te\\_gtecibt](http://www.benesse-gtec.com/fs/teachers/te_gtecibt)



◆連絡・問い合わせ先◆

---

株式会社アルク

アルク教育総合研究所

東京都杉並区永福 2-54-12

Email: [mark@alc.co.jp](mailto:mark@alc.co.jp)